

レノックス&ウォルフ版改訂版セルフモニタリング尺度の改訂

藤岡 徹 筑波大学人間総合科学研究科
高橋知音 教育科学講座

キーワード：セルフモニタリング尺度，感情表出，対人関係，ソーシャルスキル

1. はじめに

私たちが社会生活を送る上で、相手に合わせて行動を変えることは必須のことである。目上の人に、同級生と同じ態度で接しては失礼にあたる。また、相手が疲れているのに、遊びに誘ったり、延々と話をしたりするのも適当とは言いがたい。このように、私たちは日常生活では相手をよく観察し、それに基づいて自分の行動を決定しているのである。

Snyder(1974)は、セルフモニタリングの概念を「状況や他者の行動にもとづいて自己の表出行動や自己呈示が社会的に適切なのかを観察し自己の行動を統制すること」と定義し、その目的を「表出行動を強めることによって自分の本当の感情を正確に伝える」「実際にその感情は体験していないが、何らかの感情状態にあることを正確に伝える」「不適切な感情状態をうまく隠してそのような反応や表出がないように見せる」「この不適切な状態を上手く隠して適切な状態であるかのようにみせる」「何も感じなかったり何も対応しないことが不適切な場合、何らかの感情があるようにみせる」として、セルフモニタリング尺度を作成した。この尺度は、作成されたのは30年以上前と古いですが、最近でも日本語訳の改定が行われたり、道徳性や自己意識の研究に用いられたりしている。

Snyderの作ったセルフモニタリング尺度の翻訳は岩淵・田中・中里(1982)によって行なわれ、妥当性検証がなされてきた。さらに、18項目からなる改訂版セルフモニタリング尺度(Snyder, 1986)、レノックス&ウォルフ版改訂版セルフモニタリング尺度(revised self-monitoring scale, 以下RSM尺度: Lennox & Wolfe, 1984)、適切さへの関心尺度(Lennox & Wolfe, 1984)なども訳出され、妥当性が検証されている(岩淵, 1996)。

これまで、これらの尺度は幾度も適切な日本語への再訳出が行なわれてきた。RSM尺度において、岩淵(2003)の日本語訳はそれまでの日本語訳よりも分かりやすく、被検者が答えやすいものになっている。しかし、オリジナルのRSM尺度は6段階評定なのに対して、岩淵は5段階評定で妥当性検証をしている。RSM尺度の6段階評定による妥当性検証は、石原・水野(1992)によって行なわれているが、日本語訳は2003年度版の岩淵の訳の方が分かりやすい。

以上のことを踏まえ、RSM尺度を2003年度版の岩淵の日本語訳を用いて6段階評定で実施し、その妥当性検証を行なう。

2. 方法

(1) 被検者

大学生の男女127名(男性39名、女性88名)に実施した。被験者の平均年齢は22.2歳(SD = 4.75)であった。

(2) 材料

① 改訂版セルフモニタリング尺度 (RSM 尺度)

レノックス&ウォルフ版改訂版セルフモニタリング尺度を岩淵(2003)が日本語訳したものを使用した。項目数は 13 項目であり、6 段階評定で「1=非常に当てはまる、2=当てはまる、3=やや当てはまる、4=あまり当てはまらない、5=当てはまらない、6=全く当てはまらない」とした。「1=非常に当てはまる」を 6 点、そして「6=全く当てはまらない」は 1 点になるように点数を与えた。

先行研究では、下位尺度に「他者行動への感受性」「自己呈示変容能力」の 2 つがあった。「他者行動への感受性」は「相手の表出行動に敏感で、洞察力に富む傾向」と定義され、項目 2, 4, 5, 6, 8, 11 で構成された。「自己呈示変容能力」は「自己呈示や表出行動を統制し修正する能力」と定義され、項目 1, 3, 7, 9, 10, 12, 13 で構成された。

以下の 5 つの尺度は、RSM 尺度の妥当性検証に用いた尺度である。

② 適切さへの関心尺度 (岩淵, 1996)

Lennox と Wolfe がレノックス&ウォルフ版改訂版セルフモニタリング尺度と共に作成した適切さへの関心尺度を、岩淵が 1996 年に日本語訳したもの。項目数は 20 項目で、5 件法であった。セルフモニタリング尺度から分化したものだが、適切さへの関心尺度は社会不安と相関を示す。下位尺度は「社会的比較行動への関心」「状況間可変性」があった。「社会的比較行動への関心」は「適切な自己表現を行うために、社会的な情報に関心を払い、それを手がかりにする能力」と定義される。「状況間可変性」は「状況により自己の行動を修正し、状況間で変化する能力」と定義される。

③ セルフモニタリング尺度 (岩淵・田中・中里, 1982)

Snyder が 1974 年に作ったセルフモニタリング尺度を、岩淵他が 1982 年に日本語訳を行なったものを用いた。項目数は 25 項目で、5 件法であった。下位尺度は「外向性」「他者志向性」「演技性」の 3 つであった。「外向性」は「社会的な事柄への感心が高く、社交的な傾向」と定義される。「他者志向性」は「ある状況で適切な行動をとることへの感心の高さや自己の感情の統制力」と定義され、「演技性」は「場に応じて様々な役割を演じる傾向。他者を喜ばせたり、会話を流暢に行なえる能力」と定義される。

④ Kiss-18(菊池, 1998)

社会的スキルを身に付けている程度を測定する尺度である。項目数は 18 項目で、5 件法であった。ソーシャルスキルは「他者から正の反応を引き出し、負の反応を回避する手助けとなるような形で相互作用を行うことを可能にする、社会的に受容される学習された行動 (Cartledge & Milburn, 1986)」と定義される。

⑤ Fear of Negative Evaluation (FNE) (石川・佐々木・福井, 1992)

他者からの否定的評価に対する不安を自己評価する尺度である。項目数は 30 項目で、「はい」と「いいえ」の 2 件法であった。得点が高ければ、社会的不安が高いと言える。

⑥ Big-Five の神経質の項目(和田, 1996)

性格特性論における Big-Five の中の神経質傾向 (Neuroticism) の項目である。項目数は 12 項目で、7

件法であった。情動の過敏性を示し、ストレスに対して神経症的混乱を起こしやすい傾向を測定する。下位尺度は無かった。

(3) 手続き

各被検者に RSM 尺度、適切さへの関心尺度、セルフモニタリング尺度、Kiss-18、FNE、Big-Five の神経質の項目の 6 つをまとめた冊子を手渡しまたは郵送した。各被験者は自分で教示を読んで回答し、終了後に郵送または手渡しで回収した。

3. 結果

(1) 項目分析

まず、RSM 尺度の 13 項目の α 係数を求めたところ、 $\alpha = .84$ であった。表 1 に RSM 尺度得点による項目間相関を示した。

表 1 RSM の項目間相関

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11	項目12
項目2	.47											
項目3	.44	.23										
項目4	.41	.50	.34									
項目5	.28	.60	.20	.51								
項目6	.12	.37	.17	.38	.53							
項目7	.09	.13	.27	.16	.10	.10						
項目8	.36	.47	.24	.53	.49	.39	.10					
項目9	.54	.28	.43	.25	.29	.11	.03	.19				
項目10	.67	.33	.40	.38	.30	.15	.08	.41	.53			
項目11	.13	.35	.19	.37	.45	.77	.14	.43	.06	.17		
項目12	-.07	-.01	-.01	-.01	.15	.24	.18	-.01	-.02	-.02	.24	
項目13	-.46	.31	.41	.41	.26	.14	.11	.53	.53	.53	.18	.10

表 1 において、他の項目と相関の低かった項目は項目 7 と項目 12 であった。 α 係数と修正済み項目合計相関とその項目が除かれたときの α の値を、表 2 に一覧表にしてまとめた。

表 2 α 係数と修正済み項目合計相関とその項目が除かれたときの α の値

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11	項目12	項目13
修正済み項目合計相関	.56	.59	.49	.63	.61	.50	.21	.63	.43	.57	.50	.12	.55
項目が削除された場合の α 係数	.83	.82	.82	.82	.82	.83	.85	.82	.83	.83	.83	.85	.83
$\alpha = .83$													

これを見ると項目 7 と 12 を除いた時に、 $\alpha = .85$ と値が上昇する。また、修正済み項目合計相関は項目 12 のみ相関が無い。よって項目 12 を削除した。項目 12 が除かれた場合の α 係数と修正済み項目合計相関とその項目が除かれたときの α の値を表 3 にまとめた。

これを見ると、項目 7 を除いた時のみ、 α 係数は .86 に上昇する。また修正済み項目合計相関を見ると、項目 7 の相関係数が低いことが分かった。よって、項目 7 を削除した。

項目 7 と項目 12 が除かれた場合の α 係数と修正済み項目合計相関とその項目が除かれたときの α の値を表 4 にまとめた。

表3 項目12が除かれた場合の α 係数と修正済み項目合計相関とその項目が除かれたときの α の値

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11	項目13
修正済み項目合計相関	.58	.60	.51	.64	.60	.48	.20	.62	.44	.59	.47	.55
項目が削除された場合の α 係数	.84	.83	.84	.83	.83	.84	.86	.83	.85	.84	.84	.84
$\alpha = .85$												

表4 項目7と項目12が除かれた場合の α 係数と修正済み項目合計相関とその項目が除かれたときの α の値

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目8	項目9	項目10	項目11	項目13
修正済み項目合計相関	.59	.61	.49	.64	.61	.48	.63	.46	.60	.47	.56
項目が削除された場合の α 係数	.85	.85	.85	.84	.85	.85	.84	.86	.85	.86	.85
$\alpha = .86$											

表4より、これ以上削除しても α 係数が上昇することは無い。つまり、項目7と項目12を除くことで、RSM尺度が均質になったと言えた。

(2) 因子分析

次に、RSM尺度の因子構造が先行研究と同様に再現されるかどうかを検討するために、因子分析を行った。項目7と12は含めたまま最尤法によって因子を抽出した。先行研究では2因子が抽出されたが、本研究でも2因子解を妥当とした。結果の解釈を容易にするために、直接オブリミン回転を行なった。直接オブリミン回転後の因子負荷行列を表5に示す。

表5 直接オブリミン回転後の因子負荷行列

	因子		
	1	2	共通性
項目1:私は、周りの状況に合わせて、自分のふるまいを変えていくことができる。	.86	-.16	.77
項目10:私は、どのような状況でも、その状況に合わせて、ふるまうことができると思う。	.82	-.11	.68
項目9:私は、さまざまな状況に合わせて、自分のふるまいを変えていくことが苦手である。	.68	-.14	.48
項目13:私は、自分の役割に応じてふるまうことができる。	.66	-.02	.44
項目3:私には、他人から思ってもらいたいと思う自分になるように、付き合い方を変えていく力がある。	.57	.01	.33
項目4:私は、話をしている時、相手の顔のわずかな変化にも敏感である。	.47	.31	.32
項目2:私は、相手の様子を見ることによって、相手の本当の気持ちを正確に読み取ることができる。	.44	.31	.29
項目8:私は、相手の様子を見ていれば、相手が気にすることを私が言ってしまった、ということが分かる。	.43	.36	.31
項目6:私は、他の人が嘘をついているのをほぼ見分けることができる	-.11	.92	.86
項目11:私は、相手の様子から、私に嘘をついているとすぐに分かる。	-.09	.89	.80
項目5:他人の気持ちや望んでいることを分かろうとすると、わたしの勘はよく当たる。	.28	.52	.35
項目12:私は、自分にとって得になるような状況であっても、その状況に合わせてふるまうことができない。	-.14	.33	.13
項目7:私は、相手が自分のことを誤解していると分かったとき、その誤解をとくようにふるまうことができる。	.11	.13	.03
説明分散	3.36	2.41	5.78

※因子負荷量が.30以上のものを太文字・斜体とした。

なお、因子1と因子2の間の相関は.43であった。先行研究の因子構造と比較すると、先行研究では項目1, 3, 7, 9, 10, 12, 13で「自己呈示や表出行動を統制し修正する能力」と定義される「自己呈示変容能力」を構成し、これは本研究の因子1に相当した。また項目2, 4, 5, 6, 8, 11で「相手の表出行動に敏

感で、洞察力に富む傾向」と定義される「他者行動への感受性」を構成し、これは本研究の因子 2 に相当した。表 5 から読み取れるように、項目 2 と項目 4 と項目 8 は因子 2 にも.30 以上の負荷量を示したことから、項目 2 と項目 4 と項目 8 に関しては因子 2 に含まれる項目と見ることもでき、先行研究と大きな違いはないと言えた。また、項目 7 はどちらの尺度にも負荷量を示さず、項目 12 は先行研究とは異なる因子に高い負荷量を示した。つまり、項目 7 と項目 12 を除いては、先行研究とおおよそ一致した見解が得られた。

項目 7 と項目 12 を除外し、先行研究と同様に因子 1 を項目 1, 3, 9, 10, 13 で構成される「自己呈示変容能力」と命名し、因子 2 を項目 2, 4, 5, 6, 8, 11 で構成される「他者行動への感受性」と命名した。この結果を基に下位尺度を構成し、 α 係数を求めた。「自己呈示変容能力」尺度は $\alpha = .82$ であり、「他者行動への感受性」尺度は $\alpha = .84$ であった。両方とも、どの項目を削除しても α 係数が上がることはなかった。

(3) 記述統計

項目 7 と項目 12 を除いた RSM 尺度得点の満点は 66 点であり、全体平均点は 43.02 点であった。表 6 に RSM 尺度得点、さらにその下位尺度である自己呈示変容能力と他者行動への感受性の最小値、最大値、平均値、標準偏差、歪度、尖度を示した。さらに図 1 に RSM 尺度得点の度数分布をヒストグラムにして提示した。

表 6 RSM 尺度とその下位尺度の記述統計

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度
RSM尺度（項目7と12を除く）	125	14	58	43.02	7.66	-0.60	0.06
自己呈示変容能力	126	8	30	20.64	4.02	-0.17	0.65
他者行動への感受性	125	8	34	22.35	4.92	-0.41	0.15

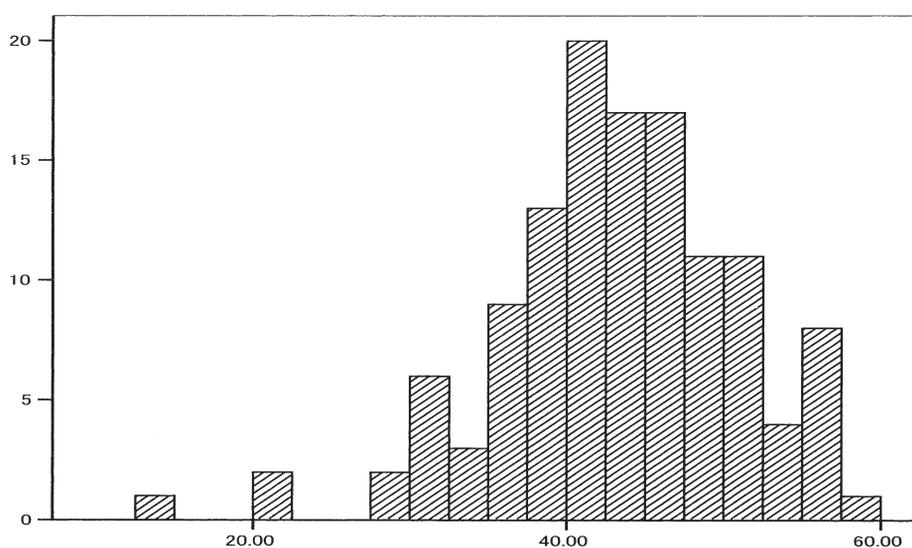


図 1. RSM 尺度得点（項目 7 と 12 を除く）のヒストグラム

表6と図1から、尺度全体、下位尺度いずれにおいても極端な分布の偏りは見られなかった。

(4) 他の検査との相関

RSM 尺度得点と適切さへの感心尺度得点、セルフモニタリング尺度得点、Kiss-18、FNE 尺度得点、Big-Five 神経質得点の相関を求めた。また同時に、RSM の下位尺度ごとのこれらの尺度得点との相関を求めた。結果を表7に載せる。

表7 RSM 尺度とその下位尺度の他の検査との相関

	セルフモニタリング尺度	適切さへの関心尺度	Kiss-18	FNE	BIG-Fiveの神経質
RSM尺度（項目7と12を除く）	.54	.33	.49	.06	-.23
自己呈示変容能力	.60	.40	.44	.03	-.18
他者行動への感受性	.23	.20	.40	.07	-.22

※相関係数が.20以上のものを太文字・斜体とした。

表7から分かるように RSM 尺度とその下位尺度は、その基となった Snyder のセルフモニタリング尺度と、RSM 尺度を作る際にともに作られた適切さへの感心尺度と弱い相関から中程度の相関を示した。さらに、これまでの先行研究と同じく Kiss-18 と Big-Five の神経質尺度と相関があった。FNE とは相関が得られないという結果が得られた。

さらに、適切さへの感心尺度とセルフモニタリング尺度に関しては、それらの下位尺度ごとに RSM 尺度、自己呈示変容能力、他者行動への感受性との相関を求めた。その結果を表8に載せる。

表8 RSM 尺度とその下位尺度のそれぞれの尺度の下位尺度との相関

	セルフモニタリング尺度			適切さへの関心尺度	
	外向性	他者志向性	演技性	社会的比較情報への関心	状況間可変性
RSM尺度（項目7と12を除く）	.57	.45	.41	.21	.35
自己呈示変容能力	.53	.55	.30	.22	.49
他者行動への感受性	.45	.24	.39	.16	.15

※相関係数が.20以上のものを太文字・斜体とした。

表8から読み取れるように、RSM 尺度とその下位尺度とそれぞれの尺度の下位尺度は、一部では相関は見られなかったが、ほとんどの下位尺度間で相関が得られた。

(5) 尺度を変数とした因子分析

今回用いた尺度は同じ構成概念を測定したり、関連の深い概念を測定したりしている。そこで、RSM 尺度、セルフモニタリング尺度、適切さへの感心尺度、Kiss-18、FNE、Big-Five の神経質尺度を変数にして因子分析を行った。最尤法によって因子を抽出した。結果、2因子解が妥当とされた。また結果の解釈を容易にするために、直接オブリミン回転を行った。表9に回転後の因子負荷量を示した。

2因子間の相関は-.15であった。表17より、因子1はセルフモニタリング尺度とRSM尺度と適切さへの感心尺度とKiss-18に負荷量を与えていた。また、因子2はBig-Fiveの神経質尺度とFNEとKiss-18に負荷量を与えていた。因子1に関しては、Kiss-18を除いてはセルフモニタリング関連の尺度である。また、Kiss-18はソーシャルスキル測定の尺度であり、様々な社会状況で適切な行動を取れるかどうかを聞いている質問紙であった。そのため、因子1は社会的適切行動因子と言えるだろう。因子2に関し

表9 直接オブリミン回転後の因子負荷量

	因子		共通性
	1	2	
セルフモニタリング尺度	.77	-.09	.60
RSM尺度（項目7と12は除く）	.71	-.14	.52
適切さへの関心尺度	.66	.26	.50
Kiss-18	-.11	.70	.50
FNE	-.14	-.61	.40
BIG-Fiveの神経質	.45	-.52	.48
説明分散	1.76	1.23	2.99

※因子負荷量が.30以上のものを太文字・斜体とした。

では、因子2は神経的混乱の起こしやすさであると考えられる。FNE尺度に負の負荷量を与えているというのは次の通りに説明できる。社会的不安が高ければ、そのストレスラーが大きくなる前に、適切に対処する術を考えるだろう。また、ソーシャルスキルを身につけていれば、ストレスが大きくなる前に、何らかの対処をすることができるだろう。

4. 考察

本研究では、5段階評定であった日本語版RSM尺度を、Lennox & WolfeのRSM尺度と同様に6段階評定にした場合の妥当性検証を行った。項目分析の結果、項目7と項目12を除外した。因子分析と他の尺度との相関では、先行研究と同様の結果が得られ構成概念妥当性も検証された。また、今回用いた尺度を変数として因子分析を行った結果、セルフモニタリングに関わる尺度が一つの因子に強い負荷量を示し、因子的妥当性も得られた。

(1) 項目7と項目12の削除

項目7と項目12が削除された理由について詳しく記す。最初に、項目7が因子分析において両因子に負荷量を示さなかった理由として、自己呈示変容能力は状況に応じて自分の行動を変容させることができるかどうかの内容の項目群であったこと、そして他者行動への感心は他人の細かなしぐさなどに気付けるかどうかという内容であったことがあるだろう。項目7は「私は、相手が自分のことを誤解していると分かったとき、その誤解を解くようにふるまうことができる」という質問内容であり、自分の真の姿に対する他人の間違った考えを改めさせることができるかどうかという内容を問うものであった。偽った自分の姿の提示ではなく真の自分の姿の提示という内容であったため、自己呈示変容能力にも他者行動への感心にも適合せず、負荷量が得られなかったと推測できる。

項目12の「私は、自分にとって得になるような状況であっても、その状況に応じて振舞うことができない」という内容については、RSMの項目の中で、唯一語尾が「できない」と否定形で文章が終わっている項目であった。また、「自分にとって得」ということは、他人にとって得であるとも限らない。そのため、被験者が他者の気持ちを優先して行動するという状況を考え回答したために他者行動への感受性に負荷量を示したと考えられる。

RSM尺度の下位尺度である「自己呈示変容能力尺度」は5項目に、「他者行動への感受性尺度」は6項目になった。しかし、この2つが削除されたことで、因子構造が先行研究と大きく変化することはなく、

内的整合性も全ての尺度で.80を超えていて、非常に安定している。むしろ、少ない項目で、セルフモニタリングという概念を測定できているのではないかと考えられる。

(2) 他検査との相関

相関に関しては、先行研究とほぼ同様の結果が得られた。相関パターンの比較のため、表 10 に本研究で用いた改訂版セルフモニタリング尺度と他の変数との相関と、先行研究における同様の相関をまとめた。

表 10 本研究と先行研究の相関パターン

	セルフモニタリング尺度	Social anxiety	神経質尺度	Kiss-18
本研究	.54	.06	-.23	.49
岩淵 (2003)	.49	-.34		.56
Lennox & Wolfe(1984)		-.58		

※相関係数が.20以上のものを太文字・斜体とした。

空欄は、その研究では妥当性検証にその尺度を用いていないことを示している。なお、Social Anxietyとは、本研究では FNE 尺度であり、岩淵では自己意識尺度の社会的不安であり、Lennox & Wolfe では FNE と EPQ (Eysenck Personality Questionnaire) の Neuroticism をあわせたものであった。先行研究では Social Anxiety で負の相関が得られたが、本研究では相関は得られなかった。これは、用いた質問紙が異なったためと考えられる。RSM 尺度は社会的不安を含まないという概念であるので、正の相関が見られなかったことで妥当性は検証されたと考えることができた。また、本研究で用いた Big-Five の神経質尺度は、Lennox と Wolfe の用いた EPQ の Neuroticism と同様の概念であると考えられる。そのため、本研究の神経質尺度で負の相関が得られたということは、先行研究の Social anxiety で負の相関が得られたという結果と同様であると考えられる。この点からも、妥当性は検証されたと考えることができる。なお、Lennox と Wolfe の用いたように、Social Anxiety 得点を FNE と Big-Five の神経質尺度を合わせた得点とせず個々に相関を見た。その理由は、「異なる心理側面を測定する尺度を合わせず、純粹に各々の心理側面と RMS 尺度との相関を見るため」と、「FNE は 2 件法で 30 項目であり、Big-Five は 7 件法で 12 項目と、構成が 2 つの尺度で異なったため」であった。残りの項目については、先行研究と一致した結果であった。

表 8 に示したように、「他者行動への感受性尺度」と「社会的比較情報への感心尺度」で相関が出なかったことに関しては、前者の他者の行動に敏感であることと、後者の他者の行動へ感心を払うことの違いにあるだろう。関心を払うというのは、あくまでも、そうしようという意気込みのことであり、意気込みが高いからと言って感受性が高くなるとは限らない。このような理由のために、相関が出なかったのだと考えられる。

「他者行動への感受性尺度」と「状況間可変性」の間で相関が見られなかった理由は、前者の「相手の表出行動に敏感であること」と、後者の「状況に応じて行動を修正する」ということの定義の差にあると考えられる。他者の行動に敏感であることと、それを認知し行動を修正することは両方ともに自己呈示変容能力に必要な能力ではあるが、異なった能力であると考えられる。

以上のように、因子構造がほぼ再現されたこと、関連尺度との相関において先行研究とほぼ一致した結果が得られたこと、既存のセルフモニタリング尺度との間で相関が得られたことから、RSM 尺度の妥当性に関して構造的側面、外的側面からの証拠が得られたと結論づけられる。

(3) 尺度を変数とした因子分析

セルフモニタリング関係の尺度は因子1の社会的適切行動因子に強い負荷量を示した。セルフモニタリングに関連した尺度が単一の因子に負荷量がかかっていることで、因子の妥当性も検証された。よって、項目7と項目12を除外したRSM尺度でも、十分にセルフモニタリング能力が測定できると考えることができるだろう。

5. 今後の課題

今回の研究で、おおよその妥当性は得られる結果となった。ただし、被験者に関してであるが、男性と女性において人数にばらつきがあった。しかも、男性は38人と少なかった。人数を増やした上で今回の結果が再度検証されるかどうかを確認する必要がある。

引用文献

- Cartledge, G., & Milburn, J. F. (1986). *Teaching social skills to children*. 2nd ed. Pergamon Books.
- 石原俊一・水野邦夫 (1992). 改訂版セルフモニタリング尺度の検討 心理学研究, 63, 47-50.
- 石川利江・佐々木和義・福井至 (1992). 社会的不安尺度FNE・SADSの日本語版標準化の試み 行動療法研究, 18, 10-17.
- 岩淵千明・田中國夫・中里浩明 (1982). セルフモニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53, 54-57.
- 岩淵千明 (1996). 自己表現とパーソナリティ 大淵憲一・堀毛一也 (編) パーソナリティと対人行動 誠信書房 pp. 53-75.
- 岩淵千明 (2003). 日本語版改訂版セルフモニタリング尺度の検討 日本社会心理学会第44回大会論文集, 742-743.
- 菊池章夫 (1998). また/思いやりを科学する—向社会行動の心理とスキル— 川島書店.
- Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. (1984). Revision of the self-monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1349-1364.
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, pp. 526 - 537.
- Snyder, M., & Gangestad, S. (1986). On the nature of self-monitoring: matters of assessment, matters of validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 125-139.
- 和田ゆかり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.

(2007年12月13日 受理)